ある
「負け組科学者」
の
随筆集３
― 彼の人生、その後―

著者：　江澤　潔
（2021/06/29）

はじめに

これは、拙著、
『ある「負け組科学者」の人生の記録』（パブリック・ドメインで提供中）、
の「続編」と捉える事もできる。

しかし、その体裁は、別の拙著、

『ある「負け組科学者」の随筆集』
や
『世の人々へ（番外編）：ある「負け組科学者」の随筆集２』
（両方ともパブリック・ドメインで提供中）

に近く、
これらの「補足」と捉える事も可能である。

ここで書かれているのは、主に、
私が 2020/10/30 に自殺に失敗して強制入院させられた
埼玉医大付属病院精神科から退院した
2021/02/10 以後、
2021/06/24 にとうとう自殺を断念するまでの
心の葛藤および変遷である。
一種の日記の様なものだと思って頂いても構わない。

その他に、
その間の社会の動き等に関する
私の感想も少々書かれている。

また、補遺として、
自殺を試みる前に私が準備した遺書も公開することとする。

この随筆集を読まれた皆様方がどう思われるかは
私には良くわからないが、
「正直」をモットーとしている私にとって、
これら私の考えを書き記し公表する事は
重要な事だと思っているので
そうするまでである。

末筆ながら、
退院後に私のことを辛抱強く見守ってくれた家族と親類、
および、
医療面その他で支えてくれた
埼玉医大付属病院精神科の皆様方、
つむぎ診療所の皆様方、
そして、秩父保健所と秩父保健センターの皆様方に、
心の底から、感謝の意を表する。

2021/06/28（月）

江澤　潔

目次

私の決断

江澤　潔　[2021/04/10]

本日（2021/04/10）、インターネットで
自殺の方法について幾つか調べてみた。
その結果、以下の様であるらしいことが分かった。

１、切腹
、、、ひどい苦痛が長く続き、すぐには死ねない（丸1日以上かかることもある）。
　　よって、効率よく死ぬには、それに続いて何か追加の手段を講じる必要がある。
　　、、、が、苦痛が激しかった場合に追加の手段を実際に講じられるか不明。

２、舌を噛み切る
、、、よくドラマや映画等で見られる手段だが、
　　実際には、死ねる確率は低いらしい。

３、頸動脈を切る
、、、うまく切れればかなり効率よく死ねる様だ。
　　、、、しかし、鏡でもないと見えない状態で狙わないといけないので、
　　　　うまく切るのは結構難しい。
　　　　　（表面から３cm ほどの深さにある事が、成功をより難しくしている。）
　　、、、実際、私は以前（2020/10/30）これをしようとして失敗した。

４、首吊り
、、、かなり効率が良く、確実性も高い方法らしい。

[決断]

当初の予定では、

切腹　-> 頸動脈を切る　-(失敗)-> 首吊り　もしくは　舌を噛み切る

を想定していたが、
切腹の苦痛の元で首尾よく頸動脈を切ったり首吊りするのは
非常に困難であろうと予想できる。
そうなると、せいぜい舌を噛み切ることぐらいしかできなさそうだが、
それによる致死率はかなり低いらしい。

そうなると、最初の切腹をなくして
頸動脈を切るか首吊りあたりが効率良い方法の様だが、
頸動脈を切る事自体は（実際に前回失敗した様に）かなり難しい、

そこで、ここは

ストレートに首吊り

を選択するのが「最上策」と言えるのかもしれない。
（出血等もすくないので、発見者のトラウマもあまり大きくならなかろう。）

もともと、切腹を目指したのは、

自分の「名誉」を保つ為であったが、

そのせいで「失敗」してしまっては元も子もない。

従って、

ここは「恥」を忍んで、

「名」を捨てて「実」を取る、

方針で行こうと思う。

２０２１年４月１２日

江澤　潔 [初稿：2021/04/12; 改定：2021/04/13&14]

２０２１年４月１２日（月）、
前日までに「やるべき事」を大体すべて片付けたので、
私はいよいよこの世を去るべく、「三度目の試み」をした。
（ちなみに一度目は 2020/10/30、二度目は 2021/12/15、）

方法は、先日ネットでリサーチした結果、
最も確実な方法の一つらしいと分かった「首吊り」をすることに決めていた。

ロープは、ビニール製のよられた荷造りロープを４本より合わせて使用することにし、
それの両端を「もやい結び」で輪っかを作り、
それを実家2Fにある自分の居室のドアノブに引っ掛けてロープの中央部分
に出来た輪をドアの上端越しに反対側に持ってきて、
そこに首をかけてドアの反対側で吊られる予定だった。

先ず、行う前に、ロープの中央部分の輪っかに手をかけて足を浮かせて
全体重をかけ、ロープおよびドアノブが私の体重を支え切れることを確認した。

そして、今度は、小さな脚立を使って、その輪っかに首を通し、
脚立から足を離した。
のどが圧迫させる感じでグエグエ言った。
それを続けていれば逝けたのかも知れないが、
この世への未練がまだあったのか、
それとも死への恐怖を感じたせいか、
１分（３０秒？）も経たないうちに
再び脚立に登って「首吊り状態」を中止してしまった。

今回のこの失敗で、ようやく私は気づいた
（あるいは「思い出した」と言った方が正しいかも知れない）：

私は実は非常に「臆病者」であることを。

考えてみれば、これまでも何度も、
「人生の転換点」とでもいうべき時に、
思い切って「一歩踏み出す」ことができずに
今日まで来てしまったのだ！！

この「臆病さ」がある限り、
「逃げ場」のある状況では
私はあの世へ旅立つべく「最後の一歩」を踏み出すことはできそうにない。
従って、次回は
「逃げ場」がない様にもっと場所と状況を調えて臨まなくてはなるまい。

もしも、
このまま「一歩踏み出す」ことが出来ずにずっと居たら、

「ハッタリかまし」と見なされても致し方ない。

それは何としても避けたいと思う。

今回のこの失敗でようやく**「腑に落ちた」**こともある。

それは、**「何故、人間は生き続けようとするのか？」**である。

これまで頭の中で考えても、

きっと「生存本能」のせいだろう、

くらいの観念的な理解しかしてなかったが、
それでもどうも「腑に落ち」なかった。

しかしながら、今回の失敗を通じて、
私自身も属している「ヒト」（あるいは「人間」）の
「生存本能」、言い換えるならば、「死を恐れ避けようとする本能」
が、如何に強いものなのか、ということを思い知った。

この本能を克服して死に至るには、

よほどの強い意志、
あるいは確実に迫り来る「殺害者」、
もしくは、本能を上回るほどの絶望感、等々

を要するのではなかろうか、
と感じた。
私は人生に絶望している訳ではないので、
これは生半可な「覚悟」では「遂行」するのは非常に困難であろう。

とは言え、
一度「約束」（あるいは「宣言」）してしまったものは仕方ないので、
次の「試み」では、
この**「生存本能」も乗り越えられるだけの準備**をして臨もうと思う。

[
また、もう一つ付け加えると、
人間に備わったこの**「異常に強い生存本能」**は、放っておいたら
必ず将来、人類の存続を妨げる「足かせ」となるであろう。
だから、そうなる前に、
我々人類はどうにかしてこの「異常に強い生存本能」を**制御する術**を
開発すべきである、と私は改めて感じた。
]

もう一つ、考えるべきことは、
私が思いとどまった（もっと正確には「途中で止めた」）時、
どうも、**「何かやり残した」思い**を強く感じていたという事である。

つまり、「やり残した事はもう何もない」と今まで思っていたのは、
実は、自分自身にウソをついていた、という事になる。

しかしながら、この時、私が「何をやり残した」と思ったのか？
は実はよく解らない。

一つ考えられるのは、
私の「最後の研究プロジェクト」（つまり「ANEX研究開発プロジェクト」）
に関連してやり残した事（『ある「負け組科学者」の人生の記録』の補遺Kに記載）
であるが、
それらはもう研究者を「完全に引退した」今となっては
やろうとしては「約束違反」になってしまうので
する事はできない、と自分でも納得しているハズである。

とすると、考えられるのは、
私の姉がよく話していた、
『ある「負け組科学者」の学習ノート』の（各節より細かい）**各項目**を
動画化して公開しよう、
という**「プロジェクト」**をまだほとんど手つかずの状態で
姉達にすべてを託してこの世を去ることへの「未練」である。
（姉達に申し訳ない気持ちと、「プロジェクト」が頓挫することへの恐れと両方ある。）

そうだとすると、この「未練」がなくなるには、
「プロジェクト」で出来る私なりの貢献を（ほぼ）完了させるしか
方法はない。
それにはもう少し（数週間〜１ヶ月間くらい？）時間がかかりそうだが、
「未練」がある限り、
仮に「試み」が成功したとしても、化けて出て来かねないので、
やはり、ここは、**私なりの貢献を果たすまで「延期」する**しかなかろう。

２０２１年5月１０日

江澤　潔 [初稿：2021/05/14]

前回の「試み」（2021/04/12）からほぼ一月経ち、
『学習ノート』の主な項目のプレゼンファイルもほぼ出来上がったので、
いよいよこの世を去るべく「４度目の試み」をするつもりでいた。

まず、何時もの様に９時ちょっと過ぎに散歩に出かけて、
家に帰ったのは１０時２０分頃だった。
（この日は、帰る途中で便意を催したので、ベルクの南西にある
公衆トイレで用を足したので少し時間がかかった。）

予め用意しておいた遺書、遺言書や電子ファイル等および貴重品等を
所定の場所に置き、
自宅内の首吊りをする予定の場所に新聞紙を敷き、小さな脚立をセットした。

そして「いよいよこの世を去るのだ」と思ったら、
これまでに経験したことが無い程に緊張して来た。
そして、あろう事か、また便意を催した。
あまりに汚い最期もみっともないと思ったので、
トイレに行って用を足そうとしたら、ほんの少しだけ便が出た。
そして洗面所で手を洗っているうちに、
「第二波」がやって来たので、
またトイレに入って用を足すと、今度はかなりの量が出た。
そしてふたたび洗面所で手を洗っているうちに、
時間が１１時を過ぎてしまった。

これは下手するとあと１０分前後で家族が帰って来て
発見されてしまい兼ねない時間である。

ネットで調べて、首吊りが完遂するのは１０数分程かかり、
また、もし「失敗」すると、脳に大きな後遺症が残り、
「植物状態」にもなりかねないらしいことを知っていた。
この、「植物状態」だけはどうしても避けたかった；
ほとんど意思もないまま「生かされ」続ける可能性が高いからだ。
（また、こう言った自殺未遂後の医療には保険適用がないらしい
こともネットに書いてあった様な気がした。）

従って、この「家族に発見されて失敗」のリスクを避けるために、
今回は実行を見送ることにした。

あの、実行開始前のとてつもない緊張感と
それに伴う便意は、
恐らく、私の身体の「死にたくない」という「生存本能」の
表れであろう。

つまり、
私は頭では「生き続けたくない」と思いながらも
身体（あるいは基本的潜在意識）では「死にたくない」と思っている、
ということなのかも知れない。
（実際のところは良く分からないが、ひょっとしたら
SNSで「死にたい」とつぶやいている人々も、
似た様なジレンマに日々さいなまされているのかも知れない。）

まあ、致し方ない。
実は、先日、『学習ノート』を見直していたら、幾つかの間違いを発見してしまい、
それが気になっていたのもまた事実である。
ここは、これらの間違いの訂正（第２弾）を公表して、
「この世への未練」をできる限りなくしてから、
また改めて実行しようと思う。

日本における英語教育

江澤　潔 [初稿：2021/05/14; 改訂：2021/05/15]

最近は、英語教育の始まりがかなり早まったので、
どうなっているのかよく分からないが、
少なくとも我々の世代（1960~70年代生まれ）やその前後が受けた英語教育では、
（私も含めた）大部分の生徒が英語を喋れる様にならなかったのは
まぎれもない事実である。
[私がその後、英語の「聴き話し」ができる様になったのは、
ひとえに、自分で「訓練」を数年にわたって行ったからである。]

しかも、喋れないだけなら、
「それは、読み書きに重点を置いた教育をしている（た）からだ」
という言い訳が成り立つかも知れないが、
実際のところは、どうやら、
我々の世代前後の多くの人々は、「読み書き」も満足にできない様である。

[ちなみに、私の場合、研究者という職業柄、英語（論文）を「読み書き」するのは
「必須業務」だったので、（自分での「聴き話し」の訓練を始める前でも）
読み書きはかろうじて出来た。（ただし、分野が近い論文や書物に限ってだが、、、。）
]

私が思うに、これは、

英語を受験競争の「ふるい」として使っている
日本の教育システムそのものに問題があるのではなかろうか？
（同様の事は、他の教科、例えば、国語や数学等にも言えるが、、、）

もう少し説明すると、
日本の学校教育制度では、その本来の目的（あるいは目標）がどうであれ、
生徒の成績がバラけた方が都合が良い。
何故なら、もしも皆が（例えば）「百点満点」だったならば、
それより上級の学校（高校や大学等）で、
レベル（例えば偏差値）による「ふるいわけ」が成立しなくなるからだ。

従って、学校では、「すべての生徒が出来る様な教育」ではなく、
「一部しか出来ない教育」が施されることとなる。
そして、テストの問題も、本当に重要な事は置いといて、
重箱の隅をつついた様な**「難問奇問」**で差別化を測る様になる。
そうこうしているうちに、
「本当に身につけるべき事」は放って置かれて、
「難問奇問」に対応する力を養う様な
教育に変貌していくのではなかろうか。

英語というのは、つまるところは、
単なるコミュニケーション（意思伝達）のツール（道具）に過ぎない。
そう考えると、
本当にやるべきなのは、
（英語を通じた）**「基本的な意思疎通の仕方」を**
（掛け算の九九の様に）**徹底的に「身体に叩き込む」こと**
であり、
（その為には、（日本の教育では不十分な）基本的な語彙力を養成する必要もある）
それができる様になってから、
（英語圏では普段めったにお目にかかることのない様な）
もっと高度な文法や構文等を（「特殊事項」として）教えれば十分である。

しかしながら、（今はどうだか知らないが）我々の頃の教育システムでは、
そういった「基本的事項」を「身体に叩き込む」訓練はほとんど行われず、
テストに出る「難問奇問」に対処する為の訓練が主に行われて来た
のではないかと思う。

その結果、大半の生徒は「落ちこぼれ」て、
（英語での）十分なコミュニケーション能力を養うこともなく、
「卒業」していったのではなかろうか？

何度も繰り返すが、**英語は**所詮はコミュニケーションのツールであり、
適切な「訓練」を受けさせすれば、誰でも（少なくともある程度は）
使える様になる代物である。
それは決して、一部の「できる」人たちだけの代物ではないのだ！
それが証拠に、英語圏では、英語は３歳児でも、
あるいは学校にもまともに行けなかった様な人々でも日常的に使っているのだ！
[もちろん、専門的な分野にいけば、（特殊な語彙等）それなりの難しさはあるが、
それも、「基本」さえしっかり出来ていれば、それほど難しくはないであろう。]

英語自身は決して難しいものではない。
子供の頃から英語圏に居れば、ほぼ自然に身についてしまうであろう。
（もちろん、大人になってから身につけるのは結構大変であるが、
それは主に「日本語（発音および語順）を捨てきれない」ことから生じる。）

大半の日本人が英語を「難しいもの」と感じてしまうのは、
恐らくこの、英語を「ふるい分け」のツールとして長年の間利用して来た
日本の教育システムのせいであろう。

言い換えてしまえば、
本来は皆が英語でコミュニケーションできる様にするのを目指すべきところを、
その「本来の目標」を無視して「ふるい」に対処する術だけを
（特に「できる」生徒たちだけに）叩き込もうとして来た
せいである。
（そんなのは「間違った教育法」だと断じても良い。）

その結果、日本では、**英語が、**
（本来ならば適切な訓練さえすれば誰でも使えるようになる筈の代物なのにも関わらず、）
何故か、**「インテリ」等「頭の良い」人達だけの為のツールであるかの様な**
「錯覚」がまん延することとなった。
そしてその「錯覚」（つまりイメージ）だけが一人歩きし、
英語ができる人は皆「インテリ」であるかの様な誤解も広まった。

[実際には、彼（女）らは単に適切な訓練を受けただけかも知れないし、
子供の頃に英語圏で生活していただけかも知れないし、あるいは
たまたま語学的才能があっただけかも知れないにも関わらず、、、。]

もう一つ、日本人の（正しい）英語学習を妨げていた要因は、
日本では海外の書物等も（重要なものなら）すぐに和訳が出回るような
システムが確立している為に、
（常に海外の最新状況と向き合わなければいけない人々を除くと）
「英語なんかできなくともそれ程困らない」事態が発生していた事である。
つまり、
市井の人々は、英語ができなくとも
これといった不自由もなく暮らして行けたのだ。（少なくともこれまでは、、、。）

それが、近年**グローバル化**のあおりを受けて、
多数の外国人が日本にやって来る様になり、
人々も政府もようやく「これではいけない」ことに気づき出したのであろう。

しかしながら、「英語はインテリだけのもの」という
長年しみついた「誤解」を払拭しない限り、
また、旧来の、英語を「ふるい分け」の道具として使用することを止めて
誰もが英語を使える様になる様な「正しい訓練」を施すようにならない限り、
大半の（あるいはすべての）人々が英語を使える様になるのは難しかろう。

今、日本の英語教育は小学校から行われる様になったが、
ここら辺のところを考え直さずにいると、
結局、
単なる**「ふるい分け」の「前倒し」**に終わってしまい兼ねないので、
注意が必要である。

[ちなみに、
大学入試の英語の試験を（英検やTOEIC やTOEFL 等）検定試験の結果に置き換えるのには、
私は賛成である。
これら検定試験はあくまでも英語でのコミュニケーション能力を測ることを

目的としているからだ。
従って、テストのほとんどは（英語圏の人々にすれば）ごく常識的な問題であり、
日本の大学入試等でありがちな「難問奇問」の類はほとんどない（筈である）。
]

できうるならば、（英語に限らず、国語、数学、その他でも）
これからの教育は、「競争（ふるい分け）のツール」を与えるのではなく、
皆が基本を身につけられる様な、**「落ちこぼれの出ない教育」**
に変わっていって欲しいものである。

２０２１年5月１７日

江澤　潔 [初稿：2021/05/17-18]

2021/05/10 に「４度目の試み」を見送ってから一週間、
気になっていた『学習ノート』およびその主な項目のプレゼンファイルの
誤りの修正（誤り訂正の公表も含む）も終え、
いよいよ今度こそ「４度目の試み」をするつもりでいた。

家族による発見を防ぐ為、場所は2021/04/12 の「３度目の試み」と同じく
2F の自分の居室でやるつもりだった。
家族に気づかれない様に、いつも通りに朝食と昼食を食べ、
仮眠を取ってから午後２時ごろに起きた。
そして、
遺書、遺言書やそれに付属したSSD やUSBメモリ、
それに身分証明書や貴重品等を入れた洗面器を
こたつの上に置き、
ドアの下に新聞紙を敷いて小さな脚立を置いた。

そして、
DIYショップで購入した直径12mm のKP製ロープの両端を
予め「もやい結び」で輪っかにしたものを
片方をドアノブに引っ掛けて、
もう片方を自分の首に掛け、
ロープをドアの上部を通して「決行」するつもりだった。

、、、しかし、怖気付いたせいか、
どうしても「最後の一歩」を踏み出すことができず、
またしても「決行」することは出来なかった。

今回のことで完全に明らかになったのは、

私は実は死ぬのが怖いのだ

ということである。

以前どっかで**「私は死ぬのは怖くない」**等と記したことがあるが、
それは**間違いだった**、ということである。
しかしながら、その時は本気でそう思っていたので、
（故意に）「嘘をついた」訳ではない。
ただ、
それまでは実際に死を目前にした経験がなかった為、
実際にそうなった時の感情・心情の変化までは
十分に想像することができなかったのだろう。

あるいは、（2020/10/30に）未遂を起こして
入院し、手記を（手書きで）書いてそれを電子文書化しているうちに、
「この世」への未練が生まれてだんだん大きくなって来ているのかも知れない。

それではこれからどうするべきか？

もう自殺は止めるべきか？
しかし、
睡眠障害等の諸障害を抱えた私が社会復帰するのには、
ただでさえ大きな困難を伴う上に、
自殺を止めてしまったら、
私はこれから「嘘つき」「ハッタリかまし」の烙印を負って
生きていかねばならない。
それに、この数十年間の自分自身の「主義主張」を覆して生きていかねばならない。

、、、本当にそれだけの苦労をするだけの価値があるのだろうか？
、、、私はそれは怪しいと思っている。

それとも、「怖い」のを克服して自殺を完遂すべきか？
その為には、
（私には備わっていないかも知れない程の）勇気を振り絞るか、
あるいは「怖い」のを克服する為の何らかの「準備」をしなければなるまい。

私は今、**完全なる「ジレンマ」**に陥ってしまった！！

、、、「進む」べきか？「退（ひ）く」べきか？、、、

しかしながら、もう一度よく考えてみると、
私はこの十年程の間、
「（研究が終わったら）死ぬ」事を前提とした言動を取り続けて来た。
そして、それにより、数多くの人々に迷惑をかけたり不快な思いをさせたりしてきたので、
私が死なない限り彼（女）らの気持ちは納まらないだろう。

つまり、今の私にはもう、「退（ひ）く」という選択肢は残されていないのだ！
だから、
それがどんなに怖かろうと、私は今死なねばならないのだ！！

「人新世（じんしんせい）」＝人類がもたらす地球の危機？

江澤　潔 [初稿：2021/05/19; 改定：2021/05/21]

本日（2021/05/19）、いつもの様に、
tenki.jp で本日から数日後までの天気をチェックした後で、
面白い記事：

（文献１）地球の危機？新しい地質時代「人新世」を考える。5月10日は「地質の日」です
(tenki.jpサプリ 2021年05月10日) - 日本気象協会 tenki.jp
(https://tenki.jp/suppl/grapefruit_j02/2021/05/10/30389.html)

および関連サイト：

（文献２）特集：シリーズ 70億人の地球　地球を変える「人類の時代」
2011年3月号　ナショナルジオグラフィック　NATIONAL GEOGRAPHIC.JP
(https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/magazine/1103/feature02/index.shtml)

に出くわした。

詳細をはしょって要点だけ述べると、
地質時代の言葉では、これまでは、
現代は新生代の第四紀の完新世（1万1700万年前、最後の氷期の終わり〜）
に属するものとされて来たが、２１世紀に入り、
新たに**「人新世（じんしんせい／ひとしんせい）」(Anthropocene)**
という「地質時代」を設けて
人類（活動）による地球環境の大規模な変化の時代
を完新世と区別する様な運動が起こって来ているらしい。（文献１）

これを初めに提唱したのは
フロンガスによるオゾン層破壊の研究でノーベル化学賞を受賞したオランダの化学者、
パウル・クルッツェン（1933〜2021年）
で、二十年ほど前のある学会での発言で**「人新世」**を提唱した。
その後、その概念は多くの学者達に受け入れられ、
彼が2002年に科学誌 Nature でその概念を正式に発表した後で、
この用語はどんどん拡がっていったらしい。（文献１、２）

そして、2007年のロンドン地質学会の層序学委員会（長：ヤン・ザラセウィッチ）
のある会合では、
２２人の層序学者たちのうち２１人が「人新世」の概念には意義があると答え、
これを地質学の正式な研究課題として検討することとなった、、、らしい。（文献２）

また、米国の著名な生物学者、E・O・ウィルソンは、
「20世紀における人口の増加パターンは、霊長類というより細菌の繁殖パターンに近い」
と書いている、、、らしい。（文献２）

更には、現代の人類活動は、（将来の）地層に

過去５度程あった地球規模の生物大絶滅に匹敵する様な痕跡を
残すだろう、と多くの科学者たちは考えているらしい。（文献１）

つまり、
ノーベル賞級の著名な科学者達をはじめ、
世界中の多くの科学者達が、
現代におけるヒトの爆発的な人口増加およびその活動拡大による
大規模な地球環境の変化（というかむしろ「破壊」）
に大いなる懸念および憂慮（あるいは「危機感」）を抱いている、
という事だ。

私はこれまで、『随筆集』や『随筆集２』で幾度となく、
人類の行き過ぎた「活動拡大」に警鐘を鳴らし、
速やかに「活動縮小」に舵を切ることを提言して来た。
しかし、
私は所詮、名声も権威もない一介の元科学者に過ぎないので、
恐らくほとんどの人々は私が単独で言うことなどには耳を貸さないであろう。
しかしながら、
私が行（おこな）って来たこれら「警告」および「提言」が、実は、
世界中の科学者達の「思い」と「根っこ」を共有しているのだ！
と知れば、
私の言うことにも耳を傾けようとする人々も多少は増えるであろう
、、、と期待している。

とにかく、少なくとも多くの科学者達が
この、現代の人類による「愚行」に対し、
私と「思い」を共有している事が明らかに分かった事は、
私にとっていささか励みとなった。

従って、もう一度、
地球上の人類全体（とりわけリーダー達）に訴える：

もういい加減、
「人口増加」や「経済成長」を目指すのはやめて、
今すぐにでも、
「人口減少」や「経済縮小」しながらも
すべての人々が幸せに暮らせる様な社会システムを構築せよ！

と。

２０２１年5月２１日

江澤　潔 [初稿：2021/05/21；改定：2021/05/22]

本日こそ、「４度目の試み」を「決行」するつもりでいた、
午前中に朝食と昼食を取って仮眠をし、
午後２時ごろに目を覚ました。
しかしながら、
どうも踏ん切りがつかず、そうこうしているうちに時間ばかりが過ぎ、
またしても「決行」を見送ることとなった。

（ちなみに、前日まで少し便秘気味だったのが、
本日は２.5日分くらいの便が出た。
やはり、「死」に対して本気で向き合うと便通が良くなる様だ。）

以前、私はある随筆を書いて（題名：「夏休みの宿題」（未発表）、添付）、
その中で、
人間が（時宜的な）「死」を後回しにして長生きする様を、
夏休みの宿題をどんどん後回しにして最終日に泣きべそをかきながら片付ける
子供になぞらえて揶揄したことがあったが、
今、
まさに自分自身がその子供の様な状態にいる事が
とてつもなく情けなくて恥ずかしい。

（他の人々にあてて書いたつもりの随筆が、今、
ブーメランの様に自分自身に戻って来ている感じだ）

、、、このままではいけない、、、
、、、潔よ、勇気を振りしぼれ！！

夏休みの宿題

江澤　潔　[初稿： 2018/12/27; 改定：2019/01/13]

夏休みの宿題に苦い思い出を持つ日本人は多いことと、私は推測する。

よくあるパターンは、
夏休み中、宿題を「後回し」し続けて
遊んだりぐうたら過ごしたりし、
最終日に泣きべそをかきながら宿題を無理やり片付ける、
というものである。

（ちなみに私事で恐縮だが、
私は夏休みの宿題は（日記と自由研究以外は）最初の一週間ですべて片付け、
休みの残りは自分で必要と思った勉強をしていた。）

今の、やたらと長生きしたがる傾向は、
この夏休みの宿題のパターンと非常に似ていると感じる。

（「死について」（about_death.rtf）でも述べたが、）
「死」は単に不可避であるだけでなく、

次世代や次々世代の「生活の場」を確保し、地球環境を正常に保つ為に「必要不可欠」である。
その様に必要不可欠な「死」を後回しし続けているという意味で、
最近の行き過ぎた「長生き願望」は、
夏休みの宿題を後回しし続ける子供達と似ているのである。

両者の大きな違いは、
夏休みの宿題の場合、それを後回しして「泣きべそ」をかくのは自分自身であるが、
「死」の場合、それを後回しして「泣きべそ」をかくのは周囲の人々や動植物も含めた
「国家」や「地球環境」である、
ということだ。

（一応、誤解のない様に申しておくと、
あなたの（家族など）周囲の人々は（少なくとも表面的には）
恐らくあなたの「長生き」を心から望んでいることだろう。
（実は、かく言う私だって（心の中では）家族や親友には長生きして欲しい。）
しかしながら、彼（女）達は、その「長生き」の結果生じるもの、
例えば、国家財政の破綻とそれに起因する生活苦や
環境破壊とそれに起因する自然災害などに対して、
いわば「間接的に」、「泣きべそ」をかいているのである。）

追記（2019/01/13）：
（これまでにも何度も申しているが、）
あなたが私の考えをどう思うかはあなた自身の自由である：
日本も含め民主主義国家では（少なくとも建前上は）「思想／信条の自由」は保証されている。
まあ、私の考えは理性的＆論理的にはごくまっとうであると信じてやまないが、
私はそれを他人に押し付ける気は無いし、
特に、人々が私の考えに（間違った方向に）影響されて
（例えば老人や障害者などへの）差別が助長されるのは良しとしない。
くれぐれも申しておくが、人は他人に自分の考えを押し付けてはいけないのだ。
（ただし、それを踏まえた上でのオープンで活発な議論は奨励する。）

これを踏まえた上で、上記の議論に関する幾つかの想定される反論に対する
私の返答を以下に与えておく。

（反論１）「俺（私）だって昔は苦労していたんだ。（今のほほんと生きて何が悪い？）」
（返答）
（ごく少数の例外を除き、）（私も含め）誰だって苦労してたし、している。
むしろ、本当に苦労した人は早死にする傾向にある。
（例えば、幕末の志士達のほとんどは、２０代、３０代で死んだ。）
だから、「昔苦労していた」ことは「今のほほんと生きている」事の
「免罪符」にはなり得ないのである。
それに、
「自分は昔苦労したから、子供や孫には楽させてあげたい」
というのが「普遍的な人情」ではないだろうか？
それなのになぜ、あなたは、
子供や孫も含めた若者達の「おもし」となって、
彼（女）達の（現在＆将来の）苦労を増やし続けるのだろうか？

（反論２）「俺（私）だって、生きるのはしんどいんだよ。」
（返答）
それなら今すぐ生きるのを止めれば良いような気がするが、、、。

そうすれば、すぐに「楽に」なれますよ！
それに、本当にしんどい人ならば、すぐにためらう事なく命を絶つであろう。
そうしないのは、「実はそんなにしんどくはない」事の証拠なのだ。

（反論３）「俺（私）が死んだら、家族や友人が悲しむから、、、。」
（返答）
確かにそうかも知れないが、それは、
「（遅かれ早かれ）必ず一度経験しなければならない悲しみ」である。
だったらそれを経験するのは今すぐでも１０年後でも大差はない。
むしろ、（上記でも述べたが）あなたが「後回し」することによって、
その「（あなたの死を）悲しむ人々」の苦しみは増す一方なのである。
だったら、
いつ人生を終えるのが最善なのかは、ほとんど自明であろう。

２０２１年5月２４日

江澤　潔［初稿：2021/05/24]

本日も「４度目の試み」を「決行」する踏ん切りがつかなかった。
一体、何が私に「この世を去る」事をためらわせるのだろうか？

一つには、
これで「全てが終わってしまう」事への漠然とした不安がありそうだ。
私は、「死後の世界」の存在については半信半疑、もっと正確には
２０％信じて８０％疑っている、といった感じである。
だから、死んだら全てが終わる事をより多く信じていると言えるので、
それが（漠然とながらも）怖いのかも知れない。

そうは言っても、それだけでは、
これほどまで二の足を踏んでいることの説明にはならない。

もう一つは恐らく、
「何かやり残した」感、
言い換えると、
私は実はこれまでの人生に十分に満足していない事、
が背景にあるのかも知れない。

その大きな要因は、恐らく、
幾つかの事が私の望んだ（そして予想した）通りに進んでいない事であろう。

その一つは、
私の「最後の研究プロジェクト」の産物である
３つの論文（LASTPIECE, ANEX, SRD Map）が思ったほど
学界にインパクトを与えていない事であるが、

これはこれら論文を学術雑誌に投稿しても恐らく無駄である事、
および、ArXiv や bioRxiv 等の公共プレプリントサーバーに掲示し損ねた事
等が絡んでいるので、
これ以上はもうどうしようもない。（従って表層意識下では諦めている。）

もう一つは、
私がせっかく作成した web サイト
（https://sites.google.com/view/kiyoshi-ezawa-phd）が、
（例えば）“江澤　潔”や “Kiyoshi Ezawa” で検索しても全く見つからない為に、
恐らく世の人々の目に止まらない事態が起きている事だ。
もっと気合を入れて作り直せばどうにかなるかも知れないが、
それには時間も相当かかるし、そこまでのやる気が生じない。
（従ってこれも表層意識下では諦めている。）

しかしながら、
私の心のどこか（恐らく深層意識）に、
これらがまだ諦めきれない気持ちが残っているのかも知れない。

とはいえ、
これらは結局、
私自身の見通しの甘さと詰めの甘さのせいなのだから、
もういい加減、未練を断ち切るより他に仕方なかろう。

少し前（３月ごろ）までは、私も「悟った」気でいたが、
それはとんでもない過信であった。
実際の私は、こんなにも「煩悩」に囚われているのだ！！

いい加減、「無理なものは無理」と割り切って、
この世への未練を断ち切らねばなるまい。
、、、さもないと、「更に酷い状況」がどんどん迫って来よう。

２０２１年5月２８日

江澤　潔 [初稿：2021/05/28]

本日も「４度目の試み」を「決行」するつもりで準備をしたのだが、
「最後の一歩」がどうしても踏み出せなかった。
実は、この一週間（5/24 ~ 5/28）は
毎日の様に「決行」する心づもりでいたのだが、どうしても
「最後の一線」を越える事ができなかった。

思うに、これは、ただ単に「死への恐れ」だけでなく、
ここでこの世を去らなかった場合に待ち受けている諸事に対する
「非現実的に楽観的な展望」、言い換えると、**「見通しの著しい甘さ」**、

がこの原因の大きな部分を占めているのではなかろうか。

先ず、「まっとうな暮らし」をする為には、
何らかの職に就かねばならないが、
私の様に１日に数回仮眠を取らないと調子がすぐに悪くなる人間を
雇ってくれる様な職場を見つけるのは大変だし、
私が、自動車を運転するのはおろか、
乗るだけでも体調が悪くなる状態であることが、
さらに職探しを難しくするだろう。
（理想を言えば、
時間の縛りがなく、更に「在宅勤務」ができる様な「職」が見つかれば
御の字だが、現実はそう甘くはないだろう。）

それに、私はもう、このハイテクな世の中においては、
「落ちこぼれ」であることが、職を得るのを更に難しくするだろう。

[これらは、今まで、
すぐに（間も無く）この世を去るつもりでいたが為に、
「深刻な問題」として直視して来なかった問題である。]

そして、
ここでこの世を去るのをやめてしまうと、
これまでの「前提」がすべて覆されることとなるので、
これまですぐに（まもなく）死ぬことを前提として取って来た数々の言動に対し、
「被害者」達にお詫びをして回らなければならなくなる。
これは「被害者」の数が少なければ可能かも知れないが、
実際には、過去十年程に渡って取って来た言動に関わるので、
「被害者」の数はかなり多く、また、広範囲に渡るので、
すべてを把握するのは、実質上、無理である。
それに、
私が今更「お詫び」したところで、
彼（女）達の気持ちが治まるとも思えない。
（むしろ、「やぶ蛇」になる可能性すらある。）

こう考えてみると、やはり私には、

この世を去る

以外の選択肢は残されていない様である。

、、、もういい加減、覚悟を決めて、「決行」するしかなかろう。
、、、私の「居場所」は、もう、この世にはないのだから、、、

２０２１年5月３１日

江澤　潔 [初稿：2021/05/31；改定：2021/06/01]

本日もまた、「４度目の試み」を「決行」するつもりで準備をし、
１度だけでなく２度、ロープに首をかけたものの、
「最後の一歩」を踏み出すことはどうしても出来なかった。

一体何がここまでも「決行」するのを妨げているのであろうか？
これまでにも幾つか原因を考えて来た。
それらは大きく分けて三つに分けられると思う：

１、「死」への（漠然とした）恐れ、言い換えると、非常に強い「生存本能」；

２、この世への、あるいは何かやり残した事への、強い未練；

３、これから生き続けることを選んだ際に待ち受けている諸事に対する
「非現実的に楽観的な展望」、つまり、大いなる「見通しの甘さ」。

これらのうちでどの要因がもっとも支配的なのか、
おそらく深層心理に関することなので、
考えてみてもよくわからない。

しかし、少なくとも表面的には、もう何も未練はないと思っているし、
これから生き続けることの難しさも分かっているつもりであるので、
そう考えると、１がもっとも支配的で、それに２と３が少しばかり混じっている
ということなのかも知れない。
とは言っても、やはり深層心理の問題なので、
その方面の専門家に診てもらわない限りは
本当のところはわからないのかも知れない。

しかしながら、この問題に関してもう一つ、
見過ごされがちだが大事な「事実」がある。
それは、

「最後の研究プロジェクト」を終え、
また、（入院中に書き溜めた）手記の電子文書化および
プレゼンファイル化を終えた**今**、
私は純粋に「社会の重荷」および「地球の重荷」と化してしまった

ということだ。
つまり、
これからは、私が生き長らえれば長らえるほど、
社会そして地球（環境）への「負担」が積算的に増えていく、
ということだ。

そう考えればやはり、
ここは、「生き長らえる」という利己的な選択肢をきっぱり捨てて、
１日も早くこの世を去るという利他的な選択肢を選ぶべきであろう。

マルクスブーム

江澤　潔 [初稿：2021/05/31；改定：2021/06/01]

NHK ニュースサイトの記事
[
Japanese readers look to Marx amid pandemic | NHK WORLD-JAPAN News
(https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/20210530_03/)

「資本論」への関心高まる コロナ禍で“経済格差”など意識か | NHKニュース
(https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210530/k10013058591000.html)
]
を読んで、

日本でもここ数ヶ月ほどの間に、マルクスの「資本論」に対する関心が、
若者層を中心に、高まっているということを知った。
（大阪市立大の斎藤幸平准教授の「人新世の『資本論』」等の
「資本論」関連書籍がよく売れているそうだ。）

どうやらコロナ禍のさなかで、
現代の資本主義が生み出した大規模環境破壊や経済格差に対する
問題意識をを人々が真剣に持ち始めたことが原因らしい。

私はこの動きは大変好意的にとらえている。
アメリカ等では、既に数年前から社会主義を見直す若者達の運動が広がっていて、
「社会主義者」のサンダース上院議員が民主党の大統領予備選挙で大健闘を見せる等、
「社会体制の変革」にもつながりかねない程の大きな社会的運動となっている。
それが、このコロナ禍の影響で、
ようやく日本にも広まろうとしているのかも知れない。

この動きが単なる「ブーム」に終わらず、
日本での「体制変革」につながる様な大きな運動へ育って欲しい。
（ただしそれは必ずしも共産主義化を目指すものでなくとも構わない。）

ただ、
一つだけ注文をつけると、
資本主義であれ社会主義（あるいは共産主義）であれ、
今後も「経済成長」を目指し続ける限り、
自然環境破壊は続くだろうから、
どうしても、
できるだけ早く（全世界的かつ計画的な）「人口縮小」「経済縮小」へと舵を切る必要がある、
ということを全世界の人々が認識して欲しい。

追記2021/06/01:
少し関連するかも知れないが、
中国が最近、各夫婦が３人目の子供を持つのを容認することにしたらしい。
これは由々しき問題である。
ただでさえも人口の多い中国でこれから更に人口が増加したら、
それによって地球環境への負担が余計に増えてしまう。
急速に進む「高齢化問題」への対策ということだが、
これでは「毒を以て毒を制す」のような感じである。
もっと賢い選択肢はないのだろうか？

“人と比べない”学力テスト

江澤　潔　[初稿：2021/06/02]

NHK ニュースサイトの記事：

“人と比べない” 新たな学力テスト 導入広がる | 教育 | NHKニュース
(https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210602/k10013063991000.html)

を読んで、「新しい学力テスト」が注目されていることを知った。
この新しいテスト（およびそれに関連した動き）は、

他人との比較ではなく、
自分の過去の結果と比べることにより、
学力の伸びを測り、
「自己効力感」や「やり抜く力」、「勤勉性」等の
『非認知能力』も伸ばしていこう

という試みの様である。

２０１５年から埼玉県で始まり、３年ほど前からほかの自治体にも広がり、
現在では１１都府県の１０１の市町村で導入されているらしい。

こういう、
他人との比較ではなくて個人々々の「絶対的」学力の変遷に注目する動きは、
好ましく思う。
それにより、競争の過熱化が抑えられ、
より多くの子供達の「自己肯定感」、そして「幸福感」、
を増すことにつながると考えられるからだ。

しかしながら、私はこれだけではまだ不十分だと思う。

なぜなら、日本の社会では、
「人生を決める」入学試験や入社「試験」の多くは、まだ、

他人との比較（すなわち「競争」）によって為されているからだ。

これらも、資格試験の様な、「絶対的評価」に基づく、
他人との競争ではない試験に変えることによって、
真の、「皆が幸福になり得る社会」が実現するのだろう
と私は思う。

２０２１年6月　３日

江澤　潔 [初稿：2021/06/03]

本日もまた、「５度目の試み」を「決行」するつもりで準備をし、
２、３度ロープを首にかけたが、やはり、「最後の一歩」を踏み出せなかった。

私の健康状態や残された能力、そして取り巻く状況等を鑑みると、
私はもはや死ぬしかないことは頭では分かっている筈なのだが、
いざ、「最後の一歩」を踏み出そうとすると
非常に強い「生存本能」が働いて邪魔をする。

思うに、
この「ドアノブを利用した首吊り」という手段では、
両足が床についてしまい、「（物理的な）退路」が出来てしまうので、
「決行」を阻害してしまう様である。
[どうやら、今の私には、
「（物理的な）退路」がある状況でも「先に進み続ける」ことは出来ない様だ。]

この「（自宅の）ドアノブを利用した首吊り」という方法が
目撃者／発見者に対するトラウマが一番少ない
（しかも他人に目撃／発見されることはほとんどない）
という意味で理想的だと思い、
この１ヶ月ほどの間試みてきたのだが、
どうも私にはこの方法で「決行」するのは難しそうだ。

同様に、「（物理的な）退路」がある方法では、私は「後戻り」してしまい、
「決行」するのは難しかろう。
一方、
「（物理的な）退路」がない方法では、
そもそも「最初の一歩」を踏み出すことができないかも知れない。

2020/10/30 に「決行」した時は、
文科省とNHKと朝日新聞に「声明文（概要）」を速達で送っていたため、
（物理的にではなくて）状況的に「退路」が断たれていた為
「決行」するより仕方なかった、
と考えることもできる。

それではやはり、
もう一度「声明文」を送りつけて、再び「退路」が断たれた状況をつくるべきか？
しかし、
それはそれで多くの人々に迷惑がかかるので、再びやる気には私はならない。
（前回送りつけた時には、私はかなりハイな状態だった。）

それでは一体、状況的に「退路」を断つには、他にどんな方法があるだろうか？
、、、残念ながら、今のところ、何も思いつかない。

２０２１年6月　9日

江澤　潔 [初稿：2021/06/09]

本日もまた、「６度目の試み」を「決行」するつもりで準備をし、
ロープを首にかけたが、「最後の一歩」を踏み出すには至らなかった。

今回で完全に明らかになったのは、
この「ドアノブを利用した首吊り」という手段では、
死ぬことは出来ないということだ、、、少なくとも私は、、、。

ロープに体重を懸けると、確かにいくらか苦しくはなるのだが、
頸動脈が絞められるというよりはむしろ喉を絞められた様な感じで、
気絶するにはかなりの時間（多分、少なくとも数分間）を要しそうであり、
この、「両足がつく状況」で、
そこまで我慢して体重をかけ続ける忍耐力は
どうやら私にはない様だ。

、、、やはり、もうこの方法を試みるのは止（や）めて、
もっと確実に「逝ける」方法を試みるしかあるまい。

頸動脈を切るのは前回（2020/10/30）の失敗により
かなり難しいことが分かっている。
従って、あと残るのは、

足がつかない所での首吊り
と
高い所からの飛び降り

くらいであろう。

前者は、場所の選定とそこまで登るのがかなり面倒そうであり、
準備にも時間がかかりそうだ。
後者はもっと手っ取り早い方法ではある（場所も大体目星をつけてある）が、

私の生来の「高所恐怖症」を克服して首尾よく成し遂げられるかどうか？
という「新たな問題」が待ち構えている。

、、、さて、どうしたものやら、、、

環境保護に関する最近の嬉しい動き

江澤　潔 [初稿：2021/06/15]

今日、NHK のニュースサイトのニュース：

「環境分野のノーベル賞」 日本のNGOの平田仁子さんが選ばれる | 環境 | NHKニュース
(https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210615/k10013085911000.html)

で、
「環境分野のノーベル賞」とも呼ばれる「ゴールドマン環境賞」を
日本のNGOの平田仁子さんが受賞したと知った。
（特に日本の）石炭火力発電所による地球温暖化への影響を抑える運動への貢献や
金融業界での「脱炭素」を進める運動への貢献
などが評価されたらしい。
日本は火力発電の問題で近年は世界から非難を浴びていることは知っていたが、
この様な人物が活動している事は知らなかった。

また、また、上記サイトの特集記事：

ビジネス特集 リサイクル率99% ゴミを捨てない廃棄物処理 | 環境 | NHKニュース
(https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210614/k10013084071000.html)

では、ある廃棄物処理業者の
徹底したリユースとリサイクルで「ゴミを出さない社会」を実現する
取り組みについて解説されていた。
一時期、苦しい時期もあったが、
今では「ゴミのコンサルタント」として、
「ゴミを減らしたい」数多くの会社から引く手あまただそうだ。

この様な動きは、
（特に日本では）まだ社会の主流となっているとは言い難いが、
着実に広まりを見せている様ではあり、
その事自体は好ましい潮流といえよう。

しかしながら、
近年の自然災害激甚化や新型コロナの世界的流行などを見ていると、
一刻も早く、これらの動きが
全世界的に普及しなければ人類に明るい未来は訪れない気がする。

、、、つまり、我々に「残された時間」はもう僅（わず）かしかないのだ！！
また、
これら環境問題は、結局、人類が地球の受容力を超えて「増えすぎた」ことが
その根本的な原因としてあるのだから、
これらの努力と並行して、人口を減らしていく努力は欠かす事はできないであろう。

何にせよ、
これらの「好ましい動き」がこれからもどんどん加速して
広まっていくことを期待している。

２０２１年6月２０日

江澤　潔 [初稿：2021/06/20]

これまで、何度も「決行」を試みて、あるいは試みようとして、来たが、
「生存本能」（もっと俗に言い換えると、私の「意気地のなさ」）が邪魔した結果、
「決行」を先延ばしし続けて来た。

しかし、その結果、とうとう私の貯金も底をついて来た。
[
父が好意で百万円ほど用意してくれたが、
私はそれに手をつけるつもりはない。
何故なら、
これまで家族にも行政にも頼らずに自活してきた事こそが
私の唯一の「誇り」なのだし、
また、
これ以上「延長」しても、死ぬ意志がある限り、
まっとうな暮らしを営むことは出来ないのだから、、、。
]

このままでは、
好むと好まざるとに関わらず、
どんなに遅くともあと数日のうちに「決行」することが
余儀なくされるであろう。
、、、今度こそ、首尾よく成功することを願う。

昨日、姉には申し訳ないことをした。
姉が、忙しい為、私に作業を手伝う様に依頼して来たのだが、
それを断ったのだ。
その時には色々と言い訳をしたが、
断った本当の理由は、
上記の様に私に「残された時間」
があと僅（わず）かになってしまった、
というところにある。

改めて、
お姉ちゃん、本当にごめんなさい。

２０２１年6月２４日

江澤　潔 [初稿：2021/06/27；改定：2021/06/28]

2021/06/09 に「（ドアノブを使った）首吊り自殺」を断念して以降、
私の心の中では、もう「飛び降り自殺」しかないだろう
と腹積もりは出来ていた。（場所は、秩父公園橋と決めていた。）
そして、
それから毎日の様に遺書や遺言書等をコタツの上に置いて、
いざ出かけようとしたのだが、
飛び降りの怖さに家を出ることすらままならなかった。
（私は若干だが高所恐怖症の気があるのだ！）

そうこうしているうちに貯金も底をつき始めた
2021/06/24 のお昼過ぎ、
ついに意を決した私は家を出て公園橋へと向かった。
その時は、日差しはあったが小雨が降っていた。
公園橋の歩道には、人影がほとんど見えなかった。
「目的地」である橋の真ん中の橋脚のところまで来て、
橋脚の周りを一周し、影に人が隠れていたりしないことを確かめ、
あらかじめ目星をつけていた地点まで行って、
（誰もいないことを確認するために）橋の下を覗いてみた。
「もうこれで最期だ」と思うと、
普段何気なく眺めている時よりもずっと高く（深く？）、怖く感じた。
結局、
恐怖に怯えた私には、手すりを乗り越える事すらままならなかった。
仕方ないので
一旦「退散」し、夜に再チャレンジしようと考えた。

家に帰って、部屋で寝転びながら思索にふけっていたが、
夕方になって、私は悟った：

今の様な状態（心身の状態、および生活環境等）のままでは、
恐らく何度「決行」しようとしても、
私は自らの手で人生を終わらす事はできないであろう。
何故なら、「生存本能」（言い換えるならば私の「死への恐怖心」）
が、私が「最後の一線」を越えることから踏み留まらせるからだ。
、、、これは、方法を如何に変えてみたところで、変わることはないだろう。

そこで、私は決めた：

これまで命を絶つことばかり考えて来たが、
私に「死への恐怖心」がある限りは、どうやらそれは無理な様であるので、
ここは一旦、自ら命を絶つことは諦めて、
少なくとも暫くは「生きていく」事に努めよう。

これは、非常に大きな「方針転換」である！
これまで私は、貯金が尽きるまでに人生を終わらすつもりで
様々な事を準備して来たので、
もう貯金も尽きようとしている今更になって
「生きる」様に方針を変えるのは、正直言って、非常にしんどい
、、、特に、私の様な「障害」を抱えた人間にとっては、、、。

単純な損得勘定だけを考えるならば、
今、人生を終わらせてしまった方が、
生き延びるよりも１０倍は楽かも知れない。
それに、私の「信用」を守ることもできる。
しかしながら、非常に強い「生存本能」（あるいは「死への恐怖心」）が、
そうさせてくれないのだ！！
（これは、当初は全く想定しなかったことであった！！）

、、、非常に見苦しく格好悪い限りではあるが、仕方ないので、
　　少なくとも私自身および周囲の状況が変化するまでは、
　　「生き恥」を忍びつつ
　　「生きる」努力をしていくしかなかろう。

一つの懸念は、この決心は、「魔神」との契約違反になるのでは？
という事である。
、、、このせいで、私の身内や大事な知人達の身に何か起こる事のない様に、
　　　ただただ祈るばかりである。

2020/10/30 に最初の試みに失敗して強制入院させられてから
2021/06/24 にとうとう断念すると決心するまでの間に、
何度も「決行」に失敗した結果、
私が学んだ事は、結局、

（私を含め）人間の「生存本能」（「死への恐怖心」）は非常に大きいので、
人間はそう簡単には自ら命を絶つことは出来ない、
という事であった。
、、、きっと、自殺を遂げた人々は、その「死への恐怖心」を克服できるだけの
　　　非常に強い意志を持っていたか、
　　　よっぽど大きな「人生への絶望感」に打ちひしがれていたか、
　　　迫り来る「何者か」によっぽど追い立てられていたか、
　　　等していたのであろう。

私も2020/10/30までに非常に大きな苦労をして来たつもりでいたが、
その程度の苦労では、まだ、自ら命を絶つのに十分な資格がない、
という事なのかも知れない。

私は以前に何度も環境問題や高齢化社会の問題等の解決策を論じて来たが、
その際にはこの「生存本能」をあまり十分に考慮に入れて来なかった。

しかし、もっと実効性のある対策を講じるには、
この「生存本能」を十分に念頭に置く必要があるのかも知れない。

補遺A：　遺書（2020/10/30 付）

拝啓、父上様、兄上様、姉上様、そして親類の皆様方、

この度はお騒がせしてしまい、誠に申し訳ありませんでしたが、

昨年度末に約束しました通り、
今年の７月末日の「最終タイムリミット」までにすべてを終わらせられなかった
責任を取り、文字通り腹をかっさばいて果てました。

これはもう、**「罰則規定」**が伴った**約束**でしたから、
私からして見れば、従うより仕方ありませんでした。

また、７月末日の後も、
設定し直した「期限」を度々延長して大変申し訳ありませんでしたが、
その時は敢えて「罰則規定」は設けませんでした。
何故なら、
もうその時点では「腹をかっさばいて果てる」事は（私の心の中では）
決まっていましたので、それ以上はどうしようもないと思ったからです。
、、、人が死ねるのは一回限りですから、、、。

私は「嘘つき」は嫌いですし、
自分でもできる限り「嘘」はつかない様に心がけてはいるのですが、
如何せん、この、
仕事や作業にかかる所用時間の見積もりに関しては、
ほぼいつも過小評価してしまいました。
（それを反省して、次回からは多少上乗せするようにしているのにも関わらずです。）
今思うに、この**「所要時間の過小評価」**が、
私の社会的信用を貶（おとし）めた、と言っても過大ではないと感じております。
でも、
これは一般的な、故意に他人を騙（だま）すためにつく「嘘」とは違うと思っています。
何故なら、その「期限」を設定した時点では、
本気でその「期限」内に終わらすつもりでいたし、その自信もあったし、
その後もその「期限」まで終わらせようと真剣に頑張っていたからです。

私が本当に「実行」してしまうとは夢にも思っておられなかった方々は、
少し私の「誠実さ」を見くびっておられたという事です。
どうかこの際、お考えを改めて頂けたら幸いに存じます。

また、今回の事でそんなにお悲しみにならないで下さい。
今だから告白しますが、
実を言うと、
７月末日までに「すべてを終わらせられた」としても、
私は死ぬ運命にあったのです。
それは、
既に別のとある人に、
（１）研究プロジェクトが無事に終わる、もしくは
（２）研究プロジェクトが終わる前に資金が尽きる、もしくは
（３）研究プロジェクトが原理的に遂行不可能と判明する、
のどれかが成立した時点で
腹をかっさばいて果てる、

と**約束していたからです。**

ここでも、「約束」は「約束」ですので、守らねばなりません。
約束を破れば「ハッタリかまし」に認定され、
私の信用はさらに貶められる事となりますので、
それだけは避けねばなりません。

それに、私はここ数年間は、
文字通り、この研究プロジェクトに全人生を捧げておりましたので、
それが終了した今、私はもはや**「抜け殻」同然**で、
また、最近は私の持病（睡眠障害）も徐々に悪化していることもあって、
これから「第二の人生」を始める様な気力＆体力はもう残っておりません。
今はただ、
研究プロジェクト終了後の「事後処理」を済ませる為に、
残りの気力の全てを振り絞っているところです。

ですから、私にとって、**今が丁度良い「人生の潮時」**なのだと思います。

[
ここで、私の「哲学」「生死観」の一部を明かしますと、
私は、人の**人生**には適切な**「潮時」**があると思っています。
それは、次の**２つの要件**が満たされた時です：
（１）もう、**子育ての必要がなくなった**時；
（２）不可逆的に、**社会にかける負担が社会に与える寄与（恩恵）を上回った**時。
私の場合、
子供がおりませんので（１）は既に満たされていました。
そして、（２）に関しては、ここ数年は体調不良の為、
かける負担の方が寄与（恩恵）を少しだけ上回った状態になっておりましたが、
今回の研究プロジェクトが完成した際に社会に与え得る恩恵は計り知れない程大きいと考え、
かろうじて（２）は満たされない、と考えて踏ん張って参りました。
そして、このたび、研究プロジェクトが終了し、
もう今後はずっと（２）も満たされることになりますので、
今こそ「潮時」と判断したのでございます。

ちなみに**私はこの考えを他人に押し付けるつもりは毛頭ありません**が、
「もし日本国民全員が私の様な考え方をしていれば、
今日の『高齢化』の問題は、そもそも起こりさえしなかっただろうに、、、」
とは常に思っておりました。

（ちなみに、私は「少子化」は問題だとは思っておりません。
この国の国土は狭い上に、（山地等）使えない土地が多いことを考えると、
「適切な人口」は、せいぜい２千万〜３千万人くらいだと思っています。
即ち、「少子化」は、この国を「本来あるべき状態」へと近ける、
好ましい現象だと思っているのです。
（問題はあくまでも「高齢化」の方だと思います。
ですが、その問題も、高齢者の方々および社会全体が
（「（年齢に関わらず）元気なうちは（年金を受／支給せず）働く／働いてもらう」と）
意識を変えればだいぶ軽減されるとは思っています。）
）
]

この様に、そもそも今回の私の「行為」は、
私の体調不良に端を発し、
私自身の「哲学」あるいは「人生観」に従い、
また、（研究プロジェクトを遂行する為に）知人や家族にしてしまった「約束」を守る為に発生したことであります。

しかしながら、その背景としては、
（私も含めた）**多くの研究者／科学者達が陥っている窮状**
があった事は、紛れもない事実です。

それと、私が弱い立場にいた故に、関わらざるを得なかった幾つかの**「研究不正」**
も告白して、

この機会を利用して、
研究現場におけるこれらの問題点、あるいはそれを許す様な「土壌」を改善する様、
訴えるつもりです。

その為、同封しました様な
『声明文：概要』を、文部科学省の科学技術・学術政策局および
少数のマスコミ（具体的には、NHKと朝日新聞のみ）
に送りました。
[
そして、私が「決行」する際に携帯していた外付けSSD には、
『声明文：概要』、『声明文』の全文、『ある「負け組科学者」の人生の記録』、
それから**各種『証拠』**が保存してあります。
これらは、恐らく警察によって「参考資料」として確保された筈ですが、
それとほぼ同じ外付けSSD を、一本置いておきますので、
どうか安全な場所で保管して置いて下さい。
]

また、**『声明文』の全文**およびその参考資料である、
『ある「負け組科学者」の人生の記録』
を、この度新設した、一般公開用ウェブサイト
（**https://sites.google.com/view/kiyoshi-ezawa-phd**
および
https://archive.org/details/@kiyoshi_ezawa2_ph_d_2nd_account_）
で
パブリック・ドメインとして提供しました。

これらをご覧頂ければ、
私のこれら問題や今回の研究プロジェクトに対する思い、
それから、私が、特に遺伝研に移って以降、今日までに、経験した「色々な事」、
等々が、もっと詳細に記述されています。

どうかお手すきの際にご覧頂けたら幸いに存じます。

[
もし文科省やマスコミから連絡がありましたら、
どなたか応対して頂けたら幸いですが、
当然ながら、「断固拒否」する権利もございますので、
どう対応するかについては皆様各々にご一任します。

（皆様で協議して、統一した対応を取るのも一つの選択肢です。）
なお、
上記マスコミ以外には連絡しておりませんので、
それ以外からの連絡があった時は特に（詐欺に）注意して下さい。
（また、上記マスコミを名乗る者でも、ご用心下さい。）
]

また、**「遺産処理」**および**「葬儀、法要」**等に関する私の意向は、
（パソコン作成の為に法的効力のない）**『遺言書』**に記しました。

法的効力がない故、
これはあくまでも**私の意向**に過ぎませんが、
一度、目を通して頂けたら幸いに存じます。

以上、今回の「行為」の事情説明と、
事後処理および対応に関してと、
いささか事務的な事をお話して参りました。

最後になりますが、
父上、兄上、姉上をはじめ家族および親類の皆様方には、
これまでお付き合い下さり、
特に年上の皆様方には可愛がって頂き、
まことにありがとうございました。

ご期待をかけられていながら、
そのご期待に十分に沿うことができなかったのは誠に遺憾ではありますが、
私は私なりに精一杯やった結果ですので、
仕方ないと思っておりますし、
自分の不器用さや対人コミュニケーションの苦手さ、そしてコンピュータ嫌い
等を考えれば、むしろよくやった方だと思っています。

今思うと、２０１１年に米国から帰国した辺りが
一番希望と野望に満ちていた頃だと思いますが、
その後、自分の「無能」さを嫌という程思い知らされ、
それと同時に体調も徐々に悪化していきました。
２０１３年に九工大に移る際は、向こうで死ぬことも覚悟して臨みましたが、
幸い、２０１６年１０月に、生きて秩父に戻ることができました。
それから、本来なら九工大にいる間に終わらすつもりだった研究プロジェクトを
秩父で（病気療養の傍ら）やることとなりましたが、
それも、１、２年で済ます予定だったのが大幅に延びて、
約４年が過ぎた今年の７月末にようやく「終了」させることが出来ました。

その間、皆様方には、
私のことを、恐らく「引きこもり」あるいは「ニート」と思い、
ご心配をおかけし、また、肩身の狭い思いをさせて来たかも知れませんが、
私自身は、
「私にしかできない、それでいて非常に重要な研究プロジェクト」を遂行する
（報酬のない）「ボランティア・ワーカー」の様な気持ちでずっとやっておりました。
病気療養の合間にということで、時間的な縛りがきつく、
更に、私あるいはこの研究のことをあまり快く思っていない連中からの

様々な「妨害工作」も受けながら、ということで
大幅に予定を過ぎてしまいましたが、
どうにか、貯金が尽きる前に「終わらす」ことが出来ました。
これもひとえに、
皆様方がご辛抱なさって私のことを見守ってくださったからこそであり、
皆様には心より感謝致します。

今年７月末のプロジェクト「終了」からは、
これまでに私の身に起こったことの「記録」とその「証拠」を揃え、
さらにはそれらを一般公開したり当局やマスコミに報告したりする準備などをしていたら、
気づいたら三ヶ月近くが経ってしまいました。
この間、皆様にはさらなるご辛抱をして頂き、まことにありがとうございました。

当局やマスコミへの報告（タレ込み）は「不発」に終わる可能性も
少なからずありますが、
私は、限られた期間内で、私なりにできるだけのことはやったつもりです。
これにより、
皆様方が肩身の狭い状況から解放されることになるか、
あるいは
更に肩身の狭いことになるか、
はある種「賭け」のようなところがありますが、
私は、「正義」はこちら側にあると確信しています
ので、
皆様方が自信と信念をもって断固として「闘え」ば、
必ず、肩身の狭い状況から解放されることになるだろう、
と信じています。

皆様方のご健闘をお祈り致します。

それでは、
朝晩ひじょうに冷え込むようになって参りましたので、
どうかくれぐれもお身体お大事に、
また、新型コロナに十分お気をつけてお過ごしください。

末筆ながら、
父上兄上姉上をはじめ家族や親類の皆様方のご健康とご多幸を、
そして、江澤家ゆかりの仏様たちの安らかなるご冥福を、
心からお祈り申し上げます。

これまで本当にありがとうございました。
敬具

2020年10月30日（金）

江澤　潔

補遺B：　遺書２（2021/05/09 付）

拝啓、父上様、兄上様、姉上様、そして親類および知人の皆様方、

この度は又お騒がせしてしまい、誠に申し訳ありませんが、

前年度に終える予定から少しばかり遅れて
ようやく（2020/10/30から2021/02/10まで）
埼玉医大付属病院の精神科で入院中に書き溜めた手記
をすべて電子文書化し、
動画やプレゼンファイルに加工しやすい形式にも「変換」し終え、
また、そのうち主だったものについてはプレゼンファイルも作成し、
これで私の『人生最後のミッション』を終えました。

そこで、かねてからの予定通り、
2020/10/30 に失敗した事を今度こそ成功させるつもりです。

『遺言書』にも付け加えておいた通り、
手記の電子文書化したファイルや動画の元となるファイル等は、
この『遺書』および『遺言書』に付随した **USBメモリ**に
保存しておきました。
USB メモリは２つありますが全く同じ内容です。
一つは「マスターコピー」として保管し、もう一つは動画作成等にご利用ください。
[動画作成には、できたら IT に強い親類の方々の
ご助力が頂けたら幸いです。]

また、
これら電子文書化した手記は、
（前回の『声明文』や『ある「負け組科学者」の人生の記録』と共に）
私の Google サイト
（https://sites.google.com/view/kiyoshi-ezawa-phd）
と Internet Archive
（https://archive.org/details/@kiyoshi_ezawa2_ph_d_2nd_account_）
でも公開しておりますので、どうかお時間のあるときにご覧下さい。
そうすれば、
私がどのような事を考えてこれまで生き、そして「死」を決意したか、
伺い知ることができるでしょう。

2021/02/10 に退院後は皆様方のご協力のお陰で
作業は割と順調にはかどり、
『ミッション』は予定より１０日ほど遅れただけで終了できました。
更にそれに加えて、
学習関係の手記のプレゼンファイル化もその後２０日程で出来ました。
改めて、ご協力まことにありがとうございました。

これで、もう私にすぐできることは全てやり尽くしましたので、
心置きなくこの世を去ることができます。

しかしながら、
このことで家族、親類や知り合いの皆様方を

悲しませてしまうと思うと申し訳なくも思います。
とは言うものの、
人間、いずれは死ななければならないのですから、
こういった「別れ」は避けられないものですので、
どうかご了承頂けたら幸いです。

遺言書にも書きました通り、新型コロナのこともありますし、
私は**葬儀、法要および埋葬は辞退したいと思います。**
私の遺骨は海にでも散骨して頂けたら幸いです。

また、
秩父保健所の〇〇さんと**保健センター**の△△さん
には、これまでのご支援を感謝しつつも、
彼女たちのご意向には添いかねる事を深くお詫び申し上げていた事を伝えつつ、
5／18 の面談をキャンセルしておいて下さい。
また、
つむぎ診療所の□□先生にも、
これまでお世話になった事を感謝しつつも、
どうしても彼女の言う通りにはなれない事を深くお詫び申し上げていた事を伝えつつ、
5／20 の診療をキャンセルしておいて下さい。

それから、できましたならば、
私と近年年賀状をやり取りしていた先生方や友人達（彼（女）達は特に大事な知り合いです！）、
そして埼玉医大付属病院精神科の方々にも、
私の他界をお知らせいただけたら幸甚です。
（この「遺書」をコピーして郵送するのでも構いません。）

また、私の主要 G-mail アドレス（xxx@yyyy）にメールをくれた友人達
（XXさん、YYさん、ZZさん、WWくん）
には、私の、心配してくれたことへの感謝の意と
「お別れ」に関するお詫びの気持ち、
を返信メールで伝えて頂けたら幸いです。

[私の心の中では、2020/10/30 に「既に死んだも同然の身」だったので、
返信はできなかったとお伝え下さい。]

前回（2020/10/30 に）失敗した時は、
日本の研究者／科学者達の置かれた状況が改善される様に、
という思いもかなりウェイトを占めていましたし、
その思い自体は今も変わりはないのですが、
どうもこの様な手段を用いてもあまり効果なさそうだと感じました。

従って、
この度の事は、結局は、

（1）過去２０年近くずっと思い続けてきた
「私なりの人生の全うの仕方」を実現させて私自らの主義主張を一貫させる必要性、

および、

（２）「約束」（「宣言」）を果たして私なりの「誠実」を貫くこと、
言い換えるならば、
「『はったりかまし』にはなりたくない！」という私の「意地」、

が主要な動機だと思って頂いても差し支えありません。

[もう一つの重要な動機は、
「契約」をできるだけ早く遂行することによって、
「魔神」の祟りが家族親類知人等におよぶのを防ぐ事です。]

もう少しご説明します。

（１）私は、（遡るとおそらく小学生くらいからの）原因不明の体調不良に
長年悩まされて来たせいもあってか、
長生きはしないだろうと思って生きてきました。
（若い頃は３０代で死ぬのではと思ってたし、
つい最近まで５０歳までは保たないだろうとも思っていました。）
そのせいもあってか、
「一つでいいから満足のいく（自分で発案した）研究を成し遂げられたらこの世を去る」
と本気で思い、特に最近１０年程は、その思いに基づいた言動をして来ました。
（私の『人生の記録』や『随筆集』でも、それらの思いが見て取れると思います。）
それらの中には、（事情を知らない人々から見れば）単なるわがままな言動や
非常に不可解な言動に映りかねないものも少なからずあった筈です。
、、、それらは、彼（女）達が、
私が当時本気ですぐに（あるいは間もなく）死ぬつもりであった
ことを知って初めて、理解できる言動となるのです。
（ちなみに「死」が絡んでいる以上、単に口で説明するだけでは「はったり」だと
思われてしまいますので、不十分です。説得力がある唯一の「説明」は、
実際に態度（行動）で示す事だと思います。）
そして、私の当時のその思いは、今でも変わりありません。

また、
体調不良に悩まされ、また、様々な嫌な目に遭わされながらも今まで頑張って来れたのは、
「（自分発案の）研究を成し遂げる」という「大きな目標」があり、
また、その「ゴール」／「刻限」を（比較的近くに）定めたからこそでした。
（それがほぼ「無制限」と思えるほど遠い「ゴール」／「刻限」だったら、
途中で息切れしていたでしょう。）
そして、研究を成し遂げた後は、（必ずしも本意ではないながらも）
自分が培って来た「学習のコツ」を人々に分け与える、
という「小さな目標」が（自殺未遂後の入院中に）発生し、その為に退院後の３ヶ月程の間、
手記の電子文書化、およびそれらに関するプレゼンファイルの作成、
を全力で行なって来ましたが、それもやり終えました。
従って、
これら大小の「目標」を達成した今こそが、
この世を去って、
私がこれまでにして来た言動および私の主義主張に一貫性を持たせる時である、
と思っているのです。

それに、実際問題として、
「目標」もなしに体調不良を抱えながらこの先何年も生き続けるのは辛い、
というのもあります。

（そして、他人から適当に付与された「目標」では、
私が生き続ける「動機」にはなりません。
、、、ひょっとしたら、ここら辺が「わがまま」だと言われる所以かも知れませんが、
私の場合、「心が動か」ないとダメなのです。）

（２）私は、「約束」には大きく分けてふた通りあると思います。
一つは、
（種々の予約等）双方の合意があれば、変更や取り消しが比較的容易にできる約束、
もう一つは、
それを取り消したり変更したりする（あるいはしようとする）
と、その人の信用（あるいは信憑性）に致命的な傷を負わせる様な約束、
です。
そして私は、「死ぬ」約束（あるいは宣言）というのは、
後者に属すると思います。
人々は大抵、（その人が重病だったり瀕死の重症を負っていたりしない限りは、）
その様な約束（宣言）は間に受けず、その様な約束（宣言）を聞いた瞬間、
その約束（宣言）をした人を「虚言（狂言）癖」を持った人、あるいは「ハッタリかまし」、
と見なしてしまい、その人を（心の底から）信用しなくなります。
ですから、唯一、「死ぬ」約束（宣言）をした人が信用を回復できるのは、
その人が本当に死んだ時（特に、約束（宣言）した通りの死に方をした時）だけなのです。
死なない限り、その人は「ハッタリかまし」の烙印を押されたままなのです。
さて、私が「死ぬ」約束（宣言）をした時、私は本気でそう思い、
相手を騙したり欺いたりしようという気は毛頭ありませんでした。
ですから、
その私の「誠実（まこと）」を示し、私が「ハッタリかまし」でないことを証明するには、
「すべてを終えた」今、この世を去る以外に方法はありません。

そして、私は「ハッタリかまし」と思われたままでも良いから生き続けたい、
とは思いません。
（上でも述べた様に、そもそも私にとっては「ただ生きる」だけでも辛いし、
私は「生きる」事も「死ぬ」事も同様な単なる「事象」にすぎないと思っておりますので、
「生きる」事に「死ぬ」事以上の価値があるとも思いません。）

そんな訳で、私は「今、この世を去る」ことを選ぶのです。

もし、
こんな私を「わがままだ」とおっしゃるなら、それは真摯に受け止めましょう。

しかしながら、そんな「わがままな」私が
これ以上生き続けても社会の迷惑になるだけでしょうから、
やはり、
できる限り早くこの世を去って社会の「重荷」でなくなる事こそが、
（既に「最後の研究プロジェクト」を終え、また、
手記の電子文書化やプレゼンファイル化も完成した）
私にできる「社会への最後の貢献」
だと思います。

今回は、改めて文科省やマスコミに知らせる様な真似はしません。
ただし、前回（2020/10/30）知らせたのがまだ「生きて」いるかどうかは
私には分かりません。
もし文科省やNHKや朝日新聞社等からの問い合わせがあったら、適宜ご対応頂けたら幸いです。

私も気付けば既に５０歳を過ぎ、
お世辞にも「若者」とは言えない身となってしまいました。
これまでの間、お世話になった父上兄上姉上や親類そして知人の方々に
改めまして感謝を申し上げます。

それでは、
天気や気温が目まぐるしく変わる季節になりましたが
どうかくれぐれもお身体お大事に、
また、新型コロナにも十分にお気をつけてお過ごし下さい。

末筆ながら、
父上兄上姉上をはじめ家族や親類そして知り合いの皆様方のご健康とご多幸を、
そして、江澤家ゆかりの仏様たちの安らかなるご冥福を、
心からお祈り申し上げます。

これまで本当にありがとうございました。

敬具

2021年　5月　9日（日）

江澤　潔